
マウンドに上がれなかった君へ…

りす君

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マウンドに上がれなかった君へ…

【Nコード】

N4605B

【作者名】

りす君

【あらすじ】

僕は、野球選手を夢見てる息子、拓也とただキャッチボールをしていた。たった、それだけなのに…なぜ息子が…

前編（前書き）

これは、親子のキャッチボールを通しての暖かく、悲しい物語。

前編

「いくぞお…それっ！」

（ヒュン）

「よっ」

（バシッ）

「お父さん、ナイスキャッチ！」

「拓也のコントロールが良いから、お父さんは捕れたんだよ。」

今、僕は目の前にいる10歳の息子とキャッチボールをしている。

彼は、僕のミットめがけてボールを投げてくる。僕はそれをキャッチして彼にボールを投げて返す。するとまた、彼がボールを投げてくる。それを繰り返すだけ、ただ…それだけ。

だけど、これが楽しい。

「次は、カーブ投げるからっ！」

（ヒュン）

彼が投げたボールは、大きく横に弧を描いて僕のミットへ収まる。

(バシッ)

「凄いぞ！なってるよ、カーブになってる！」

「へへんだっ！僕は、早くここを出て野球チームに入って、マウンドに上がるんだっ！」

「……………」

彼の願いは、野球選手になる事だ。小さな頃からボールを持ち、物心ついた頃には僕にキャッチボールをせがんできた。

「パパ、ボールなげて！なげて！」

「はいはい…それっ！」

「うわぁ、とどかないよっ！」

「ゴメン、ゴメン。まだ拓也には捕れないよな。」

「むう…」

楽しかったあの頃。

夢中で投げられたボールを走って追っかけてた我が息子。

しかし…僕と彼の幸せは、ある日突然奪いさられる事となる。

拓也9歳になる年の8月のある日。有給休暇を取った僕は、息子を連れて公園に行き、朝からキャッチボールをしていた。

「お父さん、いくよっ！」

「おう。」

彼は大きく振り被った。

「それっ…」

(ヒュン)

しかし、彼はボールを投げた瞬間…

(バタッ)

「た、拓也 あああ！！！！」

彼は突然その場に崩れ落ちたのだ…。

後編（前書き）

後編を書いたのがとても遅くなってしまい…読む読者さん達がいるかどうか解りませんが…どうぞ。

後編

僕は急いで拓也に駆け寄った。

「拓也、しっかりしろ!!」

しかし、彼は返事を返してくれなかった。

急いで救急車を呼び、拓也は近くの病院へ搬送された…。

（やはり、炎天下の中でキャッチボールをしてたから熱中症を起こしてしまったか…）

こんな安易な事を考えていた僕は、医師の見解を聴いた瞬間に“自分分は愚か者”だと悟る事となる…。

「申し上げ難いのですが…息子さんは、原因不明の血液の病に掛っています。この病は、ある程度進行してしまうと手術を施す事が出来ないのです。息子さんの病はもう手術が出来ない所まで来ています。もうそんなに長くないでしょう…。」

「……………」

「こんなに病状が進行していると、現代の医学では我々で手術を施す事が出来ず点滴での薬剤投与しかないのです。お役に立てず申し訳ありません…。」

息子は入院した。毎日、薬剤投与をしてなるべく病状を進行させないようにしていった。

「拓也、これは君自身のためにやってるんだよ。だから頑張ろうな。」

「うん！僕、絶対にこんなビョーキ治して野球すんだっ！！」

息子の言う言葉に、僕はただ涙を溢すしかなかった。この子の父親として、何も出来ないこの辛さ…悔しさが涙となってとめどなく溢れてくる…。

「お父さん…泣かないでよ、僕は大丈夫だから。」

「う…ゴメンな…ゴメンな…」

僕は、息子にひたすら“こんな不甲斐無い父親でゴメンな”と謝るしかなかった…

それから拓也は、毎日数十種類の薬剤を変えながら点滴で投与し続けた。僕はその痛々しい光景が息子には可哀想に思えて耐えがたかった…。

一日…また一日とただ虚しく過ぎてゆく。拓也の病状は一向に快復

の兆しが見られなかった。それどころか、段々と衰弱していく拓也。顔は蒼白く、身体はガリガリと痩せていく…。

出来る限り拓也の隣に僕は居たいのだが、さすがに仕事があって無理なので、居ない間は知人と変わりばんこで拓也を看病する事にした。

…妻が亡くなってなければ頼めたのだが、仕方がない。…妻は、拓也を産んで間もなく謎の弊害症を患い、若くしてこの世を去った。

（これ以上、僕の大切な人を失いたくない…だから、拓也をずっと守り続ける。）

僕は、拓也が全快する事を何時も強く願っていた。

しかし、その願いは神には届かず…儚く…虚しく散った。

拓也はその後、突然の心臓発作が起きて…医師たちの懸命の心臓マッサージも虚しく、20××年11月19日午前3時36分、9歳という短い生涯を閉じた。

拓也が亡くなった瞬間…僕は、その場で彼の亡骸^{なきがら}にしがみついて泣き崩れた…

「おい、外野いくぞ!!」

（カキーン!）

「オーライ、バック」

（パシッ）

「ナイスキャッチい!!」

拓也が亡くしてから7年の歳月が経過していた。

（：拓也が生きていたなら、高校に入学して野球していただろうに）

僕は河川敷で練習をしている少年野球チームを見ていた。

マウンドには、拓也と同じくらいの年齢の子供が立っていた。

僕は、思わず拓也とシンクロさせてしまう…。また後悔の念が生まれてしまう。悪いループ現象だ。

僕は正直、こんな苦しいループを終らせたかった。

僕はその場で決心した。

思いに踏ん切りをつける為に拓也が生まれた“この街”を出ていく
事を…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4605b/>

マウンドに上がれなかった君へ…

2010年10月10日19時33分発行